

卒業研究 釣り

Fishing

1K03B092-3

氏名 佐々木優

指導教員 主査 寒川恒夫 先生 副査 大榎克己 先生

釣りは長い歴史を経て地域、あるいは地方、捕獲しようとする魚介類によって漁法は実に様々な形で受け継がれている。授業で「石をハンマーで叩いて魚を捕る」という漁法を学んだときに純粋に驚いた。世の中にはまだまだ知らない漁法がたくさんあるのだと感じた。どういった種類のものがあるのか、またどのような漁法があるのか調べたいと考えたことが研究動機である。伝統漁法に限らず、近代漁法も含め、多くの漁法を知りたいと考えた。

今回の調査では多くの伝統漁法・近代漁法を対象とする。また伝統漁法・近代漁法の特徴について考える。

研究方法はインターネット等、参考文献から伝統漁法、近代漁法について調べる。そこからそれぞれの特徴等について分析を行う。最後に両者を比較してまとめる。

調査結果は伝統漁法が204。近代漁法が49見つかった。

近代漁法の特徴として、まず場所の特徴を考える。ほとんどが海である。近代になりより多くの漁獲物を求めるようになり、船の大型化や、網などの漁具の大型化が挙げられるため海で行われるようになったのであろう。次に近代漁法で捕れる魚介類の種類で特長を考えてみると、場所との関係もあるが、海に生息している魚介類が中心である。一回の漁業で取れる漁獲物の量に注目すると、伝統漁法に比べて、明らかに、桁違いに多い。漁船の大型化や、漁具の大型化が要因として考えられる。また漁法の主流が網であること、漁場が海であることが関係しているからである。漁具の特徴としては、まず、ナイロン製の網を使うなど科学的な素材を用いるなどしている。また、網などを引き揚げる際には、ローラなどを使い動力は人間ではなく、機械となっている。魚群探知機の使用など、効率的にも非常に向上している。作業に関わる人数差は伝統漁業に比べて多くなっている。漁業を行う人は大人が中心である。伝統漁業のように銚などは使用せず、網を使用する傾向が強いと言える。

伝統漁法の特徴として、まず場所を考えてみると、海・川・湖・沼など実に様々な場所で行われている。昔は大人から子供まで様々な人が伝統漁法を用いて魚介類を捕っていた。そのため身近な川や沼などといった場所で伝統漁業が行われていたと言えるだろう。また現在に比べ

て昔は海以外でも魚介類が多く生息していたことも、多くの場所で伝統漁法が行われていた要因であると考えられる。伝統漁法で取れる魚介類の種類は様々である。川や沼の魚介類にそれぞれ合った漁法があると言える。一回の漁業で捕れる魚介類の量は近代漁法に比べて少ない。漁具の大きさ、規模が関係しているだろう。動力が人である漁法がほとんどであるため漁具は小さくなってしまふ。漁具の特徴は、身近にあるものや自然にあるものを使用していたり、それらを材料として漁具が作られている。竹を編んで籠を作ったりしている。また魚群探知機などはもちろんなかったため、漁師の経験に頼ることが多かった。作業に関わる人数は少ない。1人で行う漁法が多いが、漁具や漁船が小さいことが要因として上げられると考える。漁法は実に様々である。道具を使わずに素手で魚を捕まえる漁法から始まり、川に毒を流すなど幅広い。道具を使わない漁法としては、他に、川をせき止めたり、石を組んで籠代わりにしたり、石を水面、あるいは岩に叩きつけたりと様々な漁法が挙げられる。道具を使う漁法では網、籠、銚、竿、あるいは鵜などが挙げられる。どちらにも共通して言えることは、漁場の特徴、魚の習性を利用していることである。

参考資料をもとに、伝統漁法・近代漁法について調べた。どちらの漁法も魚介類の特徴や習性、漁場の特徴を生かした漁法となっている。また伝統漁法の知恵や漁法を受け継いだ形が近代漁法になったものも多くあった。伝統漁法・近代漁法の大きな違いは漁場、使用する漁具、漁船の大型化、漁獲量の差にあるといえる。伝統漁法は身近な漁場で簡単な漁具を使用し、少ない量の魚介類を捕る。近代漁法はより多くの漁獲量を求め、多くが海で行われ、効率的に漁業が行えるよう改良された漁具を使用する。これから先もこれらの釣りは引き続き行われる。伝統漁法はその形、漁法を変えることなく引き継がれていくべきだと考える。また近代漁法はより効率的に、その時代の技術を取り入れた漁法が行われるようになるだろう。